

## 勉強会「英語の教え方教室」と「学び続ける教師」

中井 弘一

中央教育審議会特別部会が「教職生活の全体を通じた資質能力の向上方策」の答申(2012年8月)で最も強調したのは、「学び続ける教師像」という理念であった。「新しい学びの構築」と表現される学校の役割と子どもたちの学びの変化がその背景にある。

その「第2章 教師に対する揺るぎない信頼を確立する—教師の質の向上—」において、あるべき教師像が明示された。優れた教師の条件として以下の三つの要素に大きく集約し記載している。

### ①教職に対する強い情熱

教師の仕事に対する使命感や誇り、子どもに対する愛情や責任感などである。また、教師は、変化の著しい社会や学校、子どもたちに適切に対応するため、常に学び続ける向上心を持つことも大切である。

### ②教育の専門家としての確かな力量

「教師は授業で勝負する」と言われるように、この力量が「教育のプロ」のプロたる所以である。この力量は、具体的には、子ども理解力、児童・生徒指導力、集団指導の力、学級作りの力、学習指導・授業作りの力、教材解釈の力などからなるものと言える。

### ③総合的な人間力

教師には、子どもたちの人格形成に関わる者として、豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質を備えていることが求められる。また、教師は、他の教師や事務職員、栄養職員など、教職員全体と同僚として協力していくことが大切である。

急激で予測不能な社会の変化に対応するには、既存の知の伝達を越えた新しい学びを提供することが確かに必要で、教師自身も研鑽に励まなければならない。ここに述べられていることに対しては全く異論はない。ただ、答申や施策上の文言が非の打ち所がない論で展開されても、学校現場の教員の心にどれほど届いていることであろうか。

後藤正幸公益社団法人信濃教育会会長(『教育展望』巻頭言 2013年6月)が「学び続ける」と「学ばせられ続ける」とは異なると述べているように、法律や制度、仕組みで改革を進めても改善されることではないように思われる。「学び続ける」姿勢には、謙虚な気持ちが必要である。自らを省みるリフレクティブなマインドが必要である。そこには教師が真摯に自分を見つめ、そのうえで自発的に向上したいと思う心が求められる。求道心に終わりはない。教師自らが自主的、主体的に学ぼうとする姿勢を持たない限り、どんな法律も制度も期待される効果を発揮

することはないであろう。

学校を取り巻く環境も変化し、生徒への対応など日々の業務に追われている教師に、リフレクティブになる余裕がないのかもしれない。もどかしさを抱えながらも日々を過ごしている現場の先生に、制度や法律ではなく、元気を与えるもっと身近なものが必要である。その特効薬は簡単に見つかるものではないが、他の教師や先輩の教師の懸命な姿に感動すること、それが特効薬の一つではないだろうか。心に響いた感動は自己のエネルギーを高める。

本学では休業中を除いて、月に一度の勉強会「英語の教え方教室」を開催している。これはまったくボランティアの集いである。会費を徴収することもない。組織として体制が組まれているものでもない。日々の授業を改善したい、何かを得たいと思う先生が寄り集まって、こんなことをこう考えてやっているけどどうであろうか、それには何が大切であろうかなどを話し合っている。発表しても謝礼もない。他の授業研究会と異なり、一つ一つの指導内容に十分な時間を取り、背後にある原理や考え方を整理しようとしている。単に実践報告を聞いても、自分の力にならない。自分の中に内在化させるには、その根拠や原理をしっかりとつかむ必要がある。それによって自分で道筋をつけて、自分なりの工夫した指導を行うことができるのだ。

本学の勉強会には、そうした学び続ける姿勢を有する先生が参加している。その求める姿勢がそれぞれの先生の精神的な支柱となっていると思う。そして、そのような先生から学ぶ学校の生徒は幸せなことだと思う。学び続ける先生がひたむきに自分たちに向き合ってくれているのだから。

微力ではあるが、現場の先生のその姿勢を支援する活動を続けていきたいと思う。